

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	熊本と龍南 : 詩歌
Author(s)	故 夏目, 漱石
Citation	龍南, 200 : 141 - 143
Issue date	1926-12-25
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/8922
Right	

熊本と龍南

故夏
目
漱
石

颯と打つ夜綱の音や春の川（白川）
永き日を太鼓打つ手のぬるむなり（本妙寺）
湧くからに流るこからに春の水（水前寺）
しめ縄や春の水湧く水前寺（全）
上 畫津や青き水葉に白き蝶（畫津湖）
禰宜の子の烏帽子ついたり藤の花（藤崎八幡）
春の夜のしば笛を吹く書生哉（明午橋）
若葉して手のひらほどの山の寺（成道寺）
海を見て十歩に足らぬ畑を打つ（花岡山）

熊本高等學校秋季雜咏

いかめしき門を這入れば蕎麥の花（學校）
粟みのる畑を借して敷地なり（全）
松を出てまばゆくぞある露の原（運動場）
韋編断えて夜寒の倉に束ぬたる（圖書館）

- 秋はふみ吾に天下の志(全)
- 頓首して新酒門内に許されず(習學寮)
- 朝寒と申し襦袢の贈物(全)
- 孔孟の道貧ならず稻の花(環邦館)
- 古ぼけし油繪をかけ秋の蝶(全)
- 赤きもの少しは參れ蕃椒(倫理講話)
- かしまる膝のあたりやそごろ寒(全)
- 朝寒の顔を揃へし机かな(教室)
- 先生の疎霧を吹くや秋の風(全)
- 苔青く末枯るべきものなし(全)
- 南窓に寫眞を焼くや赤蜻蛉(物理室)
- 暗室や心得たりときりぎりす(全)
- 化學とは花火を造る術ならん(化學室)
- 玻璃瓶に糸瓜の水や二升程(全)
- 剝製の鳴鳴かなくに晝淋し(動物室)
- 獎噲や圖を排して茸の飯(食堂)
- 大食を上座に栗の飯黄なり(全)
- 瓜西瓜富妻那ならぬなかりけり(演說會)
- 就中うましと思ふ柿と栗(全)

稻妻の目にも留らぬ勝負哉（擊劍會）
容赦なく瓢を叩く糸瓜かな（全）
轉げし芋の鳥渡起き直る健氣さよ（柔道試合）
靡けども芝を倒し能はざる（全）

北千反畑に轉居して四句

菜の花の隣もありて竹の垣
鶯も柳も青き住居かな
新しき疊に寝たり宵の春
春の雨鍋と釜とを運びけり